
夏の幻

さくら いろは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の幻

【著者名】

さくら いろは

N8525E

【あらすじ】

とある大学生の、ある夏の朝。物語性はありません。

一定のリズムで走る電車。

四角い鉄のかたまりがこんなにも速く走っているだなんて、不思議な話。窓を開けて、顔を出して、風にあたりたい。

遠くには河原が見える。確かに小さい頃、あんな河原でお母さんと一緒に遊んだ。

後ろから小さな衝撃があつて、吊革を握る右手に力が入った。いつもはもうひとつ前の電車に乗るのだが、少し寝坊しただけで、電車の中は一変する。普段なら軽快な電車の音が、今日は客を食い過ぎたせいか、心なし、鈍い。

「夏だからつて暑すぎでしょ。」

「私最近、鬱だよーーうつーー」

「私も！」

自分が鬱だと言える時点で、あんたたちは鬱じゃないんじょう。とか思つてる私が鬱なのか?いや、違う。ただの夏バテだ。大きな街にある駅に着くと、同じような服を着た人たちが次々と降りて行く。少し涼しくなった車内で、空いたシートに腰かけて、窓の外を見た。もう河原は見えない。

眠るには微妙な時間だな……。そう思つて、視線を車内に戻す。

ふと、隣が暖かくなつた。沈みかけていた意識が浮上する。懐かしい匂いがした。

気になつて隣を見ると、そこには、懐かしい母の姿があつた。

「ちゃんとご飯食べてるの?」

母は言つた。私は戸惑い、返事を返し損ねた。

「あたなは食が細いんだから、きちんと三食、食べなきゃ駄目よ。」

ふふ、と笑うとできる小さなえくぼは、確かに母のそれだつた。

「大丈夫。ちゃんと食べてるとよ。でもまたお母さんのだし巻き卵が

食べたいな。」

ほつと安心して、私も母に言った。

「また寝るときにお腹出して、風邪ひいたりしてないよね？」

別の声が聞こえた。懐かしい声。その方、母と反対側の隣を見ると、そこには、懐かしい友の姿があった。

「それも大丈夫よ。それより、来るなら来るつて前もつて言つておいてよ。どうして急に……」言いながらもう一度母の方に向き直ろうとした時に、遠くの方で、アナウンスが聞こえた。そこではつと気づいた。私の頭は深く垂れていた。駅を確認した。私の降りる駅。西隣を見ると、もうそこには、母の姿も友の姿もなかつた。急いで鞄を手にとり、出口へ向かう。電車を降りて、もう一度だけ振り返つた。閉まつたドアの向こうに、誰も乗せていないシートが並んでいるだけだつた。

「相当な夏バテだわ……」

ポツリと呟いた言葉は、すぐに電車にかき消された。

「しつかりしないと、夏に呑まれる。」

さつきよりもはつきりと呟いて、右足を踏み出した。

次の休みには、懐かしい家に帰つてみようか。そう考えた私の頬は、少しだけ、緩んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8525e/>

夏の幻

2011年2月2日03時27分発行